

別室登校の支援について

不登校児童・生徒の状況

本校の不登校になった当該生徒の状況は、過去にあった同級生とのトラブルがきっかけで欠席が多くなり、授業参加に意欲はあるが、クラスに入ることができない状況とともに、起立性調節障害があり、遅刻をした際に、周りからの言動・視線等が気になり、クラスに入ることができない状況である。

具体的な取組

・校内体制の強化

当該生徒が登校した際は、別室対応担当教員等が別室等で、その生徒の様子や保護者から聞いた連絡事項等を基に対応する。学習指導については、ICT等を活用し全教職員に周知し、生徒の状況にあった適切な支援を組織的に行えるようにしている。

・不登校生徒指定項目数値の減少及び解消
欠席生徒の家庭・本人に担任が連絡を取り、本人・保護者の思いを受け止めたり、修学旅行や移動教室等学年行事の参加を促したりしたことで、本人の登校意欲につながり、柔軟な登校や本人が希望する形で行事参加を行うことができた。

・組織力の向上

本年度より別室登校専用の教室を用意し登校刺激に努めた。その際、職員室にボードを用意し、在室生徒の状況を見える化した。全校体制で、空き時間教員が指導していった。技術の授業は生徒に好評だった。



・協議会・研修会の参加

担当教員が参加し、他校の取組内容等について生活指導部会で共有すると共に、各学年の個別対応に活用できるよう、情報の整理を行った。

・普及・啓発

本校は区の不登校対応の研究指定校である。不登校対応加配教員の対応と校内体制の構築等、区の発表会で普及・啓発活動を行う。

成果

・別室登校により、ほぼ1年間以上不登校状態であった生徒2名が学年行事に参加できた。また、起立性調節障害の生徒1名が周囲の目を気にすることなく登校できるようになり学習に対して意欲的に取り組むことができた。

課題

別室登校生徒への学習保障として、実技教科の授業補充の実施が難しい。また、別室登校もできない生徒へのアプローチ方法が課題。

不登校生徒の支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、学習や人間関係など様々な面で不安を抱いている。中学校に入学してから徐々に欠席が増えていき、次第に長期化するようになる。その後、週に1回程度の別室登校ができるようになり、オンラインを活用した学習への参加や「ほっとスクール」への入級などにより、活動範囲が広がりつつある。

具体的な取組

○校内支援委員会での検討

週に1回校内支援委員会（管理職、S C、養護教諭、すまいるルーム専門員、生活指導主任、各学年教員、特別支援教育コーディネーター）を実施し、当該生徒の現状について把握し、具体的な対応を協議している。

また、その内容は他の教職員にも共有し全校の協力体制を構築している。



○定期的な別室登校や家庭連絡

週に1回程度別室において面談をしている。面談の中では日常的な会話をしたり、可能な範囲で教科の学習にも取り組んだりしている。また、面談内容を家庭に連絡し、状況に合わせて家庭訪問するなど、家庭との情報共有を密にして今後の対応について相談している。

○魅力ある学校づくり

Hyper-QUの結果から「満足群」や「不満足群」等の分布を学年ごとに検討し、学級や学年の課題を分析する。また個々の生徒の状況も踏まえながら、一人一人の生徒にとって魅力ある学級・学年・学校になるよう行事や生徒会活動の充実など課題解決に向けた対策を講じている。

○加配教員連絡協議会への参加

連絡協議会を通して、他校の取組を情報交換することができた。それを生かして、本校の別室の在り方を見直すなど、課題解決につなげることができた。

成果

学校が組織的に対応することで、一人一人の生徒の状況を多面的に理解することができた。また、そのことによって当該生徒への適切な支援をすることができ、別室登校やほっとスクールへの通級など、状況の改善につなげていくことができた。

課題

改善は見られるが、根本的な課題解決、卒業後の進路や社会的自立に向けて、どのように支援していくか、多角的に検討していく必要がある。

別室登校支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、1年生で、入学当初は学級に加わり、様々な活動に積極的に取り組みながら学校生活を送っていた。しかし、複合的な要因による人間関係への困り感を感じるようになったことから、教室に入ることが難しくなり、1学期の途中から校内の支援スペースへの別室登校をしている。

具体的な取組

【当該生徒の情報共有と組織的対応】

別室登校の対応が最優先である状況を校内で共有した。また、本人の負担を考慮しながら、学習やコミュニケーション活動を行った。特別支援委員会の検討をもとに学年や教科担任から教材を配り、支援員のサポートのもと学習に取り組んだ。

【特別支援委員会・校内体制強化】

加配教員やSCを含む特別支援委員会では、学年から提案された支援策について、再検討を行い、具体策を支援員やサポーターに実施するように依頼した。該当生徒の変容を継続的に把握するとともに、見守りの強化や学習課題の提示等につなげた。

【別室登校生徒への支援スペースの活用】

校内の支援スペース「ほっとルーム」へ継続的に登校することができている。また、本人の学習内容の定着度に応じて、学習に取り組んだ。当該学年の学習内容と異なるものはあるが、学習への意欲につなげることができている。

さらに、支援スペースで過ごす生徒と交流する場面も見られ、コミュニケーションの確保につなげることができた。

【研修会の参加・個別支援の充実】

研修会で得られた他校の取組を自校に還元することができた。「支援日誌」を学年毎に作成した。支援員が1日の行動の様子を記入する。個々の生徒の状況把握が容易になり、当該生徒への声掛けや指導に役立った。



成果

加配教員と学年、SC、支援員等が互いに連携をしながら、当該生徒への対応を行った。学校に継続的な登校ができており、さらに友人や大人との交流の機会が確保できていることは、該当生徒にとって大きな前進であったといえる。

課題

別室登校の生徒への学習のサポートや学習内容の設定に課題がみられる。また、将来的な見通しをもった指導の強化が必要である。

不登校生徒への対応について

不登校児童・生徒の状況

不登校生徒の居場所である「ひまわり」を金曜の10～12時に開室し、3年2名、2年2名が利用している。3年生の女子2名は、定期的に通うことができ、1名は1学期後半から教室にも何度か入室することができた。もう1名も、考査を別室で受験することができた。また、2人とも9月の修学旅行の参加も希望している。2年生の男子2名は、1学期前半は通うことができた。後半からは欠席が増えたが、担任や学年教員との連絡が密にとれていて、今後の支援方針を検討しているところである。

具体的な取組

<組織力の向上>

○不登校生徒が、行き渋りが出始めたときの対応について校内委員会で確認。

- ・週1回程度電話連絡。(安否確認含む)
 - ・SC面談、別室登校(ひまわり)、放課後登校、勉強で図書室利用を勧める。
 - ・保護者に「不登校相談窓口」を周知。
- ※フリースクール等は出席扱いが可能。
(例:ほっとスクール、ほっとルームオンライン、メンタルフレンド派遣)



<個々の不登校生徒への支援>

- 不登校生徒への支援として別室登校「ひまわり」の設置を行った。
- 定期考査の別室受験のために別室を用意した。
- 誰もが参加できる行事の工夫
 - ・見学エリアを設けた。〈運動会〉保護者席と一緒の席または、校庭に面した教室から他の生徒から見えないようにした。〈学芸発表会〉生徒入場の時間とずらして保護者席の後ろに座席を設けて参加した。

<加配教員連絡協議会及び都不登校対策担当主催研究会の参加について>

- 職員会議で不登校加配教員連絡協議会の参加報告を行い、研修成果の伝達を、校内ICT掲示板等を活用して行った。

<実践の成果等についての普及・啓発について>

- 学校だよりやPTA役員会・運営委員会において、別室登校について紹介したり、説明・報告を行ったりした。また、区内生活指導主任研修会において自校の事例について報告を行い、他校に対し別室対応の成果と課題について普及・啓発を行った。

成果

不登校生徒対応教室の「ひまわり」を開室したことによって不登校の生徒が週1日登校することができるようになった。また、週1日「ひまわり」に登校することをきっかけに学級への復帰ができるようになった。

課題

現在はSC相談室を利用しているが、利用できる日が限られている。不登校生徒は他の生徒と会いたくない場合があり、それに対応できる環境整備が課題である。

加配措置終了後の組織づくりを見据えた不登校生徒対応

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は中学3年生であり、中学2年の11～12月から欠席しがちになった。それまでは塾や習い事も完璧にこなしていたが、全てがうまくいかない自分は駄目だという思いが強くなり、登校意欲が湧かなくなった。1月以降、定期考査以外は欠席が続き、思春期外来を受診した。

具体的な取組

組織力の向上

デジタル機器を活用した支援として、オンライン授業と定期的な登校を組み合わせることで生徒自身が決めたペースを尊重しながら学習を支援した。朝礼等の集会もタブレット端末を用いて配信を行い、生徒が学校への所属感を得られた。進級後もオンライン授業を受けることができている。



加配教員連絡協議会への参加

加配校連絡協議会に参加し、他校の成果や課題を学んだ。自校に反映できそうな内容については、適宜校内掲示板や生活指導部会等で情報を共有し、各学年の取組の参考とできるよう関係する情報の整理を行った。

実践の成果等についての普及・啓発

令和5年度不登校対応加配校事例発表会で、自校の実践の成果と課題について発表した。自校の取組を振り返り、次年度以降の組織体制を確認できる機会となった。

校内体制の強化

年度当初に校内体制の見直しを行い、組織的な支援を検討できる体制を再構築し、窓口の一本化や情報伝達の流れについて整理した。

生徒情報は支援委員会で共有し、定期的に支援の方向性を確認している。議事録は全教職員に周知し校内での共通理解を図っている。



成果

オンライン授業が継続できたことで生徒が学校への所属感を失わずに過ごせている。スクールカウンセラーと保護者との間には信頼関係が構築され、現在も定期的な面談を行っている。

継続的な支援と組織として対応することの意義等を全教職員が理解することができた。

課題

組織体制の運用は加配措置終了後が本番である。支援が途切れず、より良い形で継続できるよう、今後も校内体制や情報の取扱い等について、さらに試行錯誤を重ねる必要がある。